

## 見立てと介入

小林 隆 児\*

**Abstract:** First, the problem with the fundamental structure of the international diagnostic standards for developmental disorders being specification in terms of syndromes based on characteristic behavior or words is discussed. Stating how the evaluation of behavior or words is stipulated by our tacit values, the importance of examining the developmental process of socialization of such behavior or words is propounded, in children with developmental disorders, particularly those with autism and other children with difficulty in establishing interpersonal relationships.

Next, the problem pertaining to the process of acquiring the function of language cognition is discussed. Starting with the concept that the meaning of any given object is not stipulated as a unique existence, but by context, it is pointed out that in order to relate the meaning of some object to a child, sharing with the child "which" attributes of the object the child should focus upon and "how" it should be dealt with are indispensable. This is then followed by discussion of how this cannot be accomplished without deepening of affective communication upon the basis of attachment formation.

Jpn. J. Med. Psychol. Study Infants, 11 (1): 27 - 34, 2002

**Key words :** affective communication, attachment, attribution of object, behavior, intention, linguistic-cognitive function

### 従来 of 早期診断の枠組み

最近の精神医学における臨床診断は、多くの場合、国際診断基準に沿って行われることが慣

On diagnosis and intervention in autism

\* 東海大学健康科学部社会福祉学科

(〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台)

Ryuji Kobayashi: Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences. Bohseidai, Isehara, Kanagawa, 259-1193, Japan.

例となっています。その最大の特徴は、行動特徴による症候群の特定化とっていいでしょう。国際的な診断基準策定にあたり、極力、主観的なものを排除するという近代科学の基本的姿勢が徹底して貫かれたため、疾患特異的な症候の探究は、行動面に限定されてきました。いかにきめ細かく行動を観察し、そこに見られる差異を明らかにしていくか、という姿勢が重視されています。そこには要素還元主義のもとに、徹底した行動観察の緻密さの追求の姿勢を見てと

ることができます。

このような診断の枠組みのもとで、早期診断を考えていくと、大きな自己矛盾にぶちあたります。早期診断（と早期治療）は少しでも早く疾患を発見し、介入することですから、先の行動特徴としての何らかの症候を見いだすとともに、さらには早期兆候、それも biological marker につながるような性質のものを発見しようとするようになります。その背景には、発達障害は生物学的原因に基づくという仮説が前提とされていることは言うまでもないでしょう。しかし、診断の厳密さを求めようとする、症候が形成され、病態が完成している方が好ましいわけですから、できる限り長期的観察が求められます。

このように考えていくと、発達の問題を早く見つけることの追求において、症候学的水準で検討していくことには、いろいろと矛盾を孕んだ問題が浮き彫りになっていきます。

### 行動特徴に基づく診断方法の問題

発達障害（に限らず、精神疾患全般に渡って）を行動特徴から見ていこうとすると、当然行動そのものが、了解可能か否か、正常か異常か、社会的か非社会的・反社会的か、といった評価基準によって判断されることになります。ここで指摘しておきたいことは、このような評価基準の背景には、子どもの行動の持つ意味を、われわれの暗黙の価値観（共同主観）でもって規定しているという一面があることです。勿論、同じ文化的背景を持っている大人同士の世界であれば、多くの場合、行動は共通の意味を帯びやすく、そのことによって対人関係が円滑に営まれているわけですから、さほど大きな矛盾を孕んでいないかもしれません。しかし、発達途上の子どもたち、とりわけ対人関係に深刻な問題を持つ子どもの場合には、行動特徴のみを捉える視点には大きな問題が潜んでいることを見逃すことはできません。それは何かと言えば、子ども（に限らず）の実際の行動の意味は、当

事者の主観（内的世界）に強く規定されているとともに、その文脈にも強く規定されるからです。すなわち、行動は一見客観的な指標であるかのように錯覚されていますが、厳密に見ていくと、実際には行動の持つ意味は、その置かれた文脈によって容易に変化するという、文脈依存的なものなのです（小林，2000）。

ここで問題とされるべきは、行動がどのような過程を経て社会化していくか、という本来の意味での発達の視点が欠けているところにあります。発達障害を論じているにもかかわらず、発達の構造そのものがどのようなものか、その点の検討があまりにも乏しいことが大きな問題なのです。

### 従来診断と治療の基本的考え方

もう一度くりかえしになりますが、これまで行われてきた発達障害、とりわけ自閉症の診断と治療の基本にどのような考え方が認められるかを再検討してみましょう。

国際診断基準にあるような三大行動特徴（症候）をもとに自閉症の診断は行われますが、それとともに、治療方針を策定するためには、その子どもにどのような言語認知面の特徴（遅れや歪み）があるかを、さまざまな評価法でもって評価されます。言語認知障害の評価はどのように行われているのかを考えてみましょう。

客観的な評価を行う際には、検者と被検者とのあいだに必ず評価するためのなんらかの道具を必要とします。種々のチェックリストや検査道具がそれにあたります。具体的にある検査道具を示しながら考えていきましょう。ことばの理解や表現の能力を評価しようとするれば、ある対象が描かれた図版を示します。それを見て被検者は何かを答えます。その図版に描かれたある対象、ここではとりあえず、それを「りんご」としましょう、そこに描かれているのは「りんご」ですが、「りんご」そのものではなくしてありません。私たちがその図版を見て「りんご」だとすぐに分かるのは、果物の中で「り

んご」がどのような特徴を持っているかを暗黙のうちに分かっているからですし、それを可能にしているのは、「りんご」を描いた作者がまさにそのことをよく分かっていたからに他なりません。すなわち、その図版は「りんご」の特徴を最大限生かして描かれたものなのです。しかし、実際の「りんご」は、このような図版に描かれた物とは似て非なるものです。さらには「りんご」と言っても千差万別で、どれひとつとってもまったく同じ物はないのです。図版に描かれた「りんご」は実物そのものではなく、「りんご」という物の特性を描きだしたもので、つまりはそこには「りんご」という物の持つ象徴性が示されているということになります。

もっとわかりやすい例を示しましょう。ある社会的場面や状況を理解（認知）する能力があるか否かを評価するために、ある社会的な意味を持つ場面が描かれている図版を用いることがあります。「ことばのえほん」のテスト4は、幼稚園か小学校の校庭で、女の子が乗っていたブランコを取り上げようと意地悪をしている男の子を、他の二人の子どもたちが心配そうに取り囲んでいます。そんな場面を見つけた先生が仲裁に入ろうとしてやってくる、という場面の図版です。私たちはこのような図版を見ると、今述べたような場面であることをほぼ間違いなく理解することができます。

私たちがこのような図版を見て、すぐにある状況を思い浮かべて理解することができるのは、女の子がブランコに乗っている場面、男の子が意地悪をしている場面などが、一枚の図版に凝縮して重ねて描かれているからですが、実際の状況とこの図版に描かれている内容とは、似て非なるものであることは明らかです。実際の状況を忠実に絵に描くことなどできません。ある場面は一瞬にして他の場面に変わりますし、その場に居合わせることでもって初めて感じ取ることができるものなど、無数とっていいほどの場面が次々に展開しているのが実際です。私たちは、自分たちにとって社会的に意味のある

場面を、図版に描きだしています。私たちはある社会的場面での自分にとって（重要な）意味を持つものを切り分けて描きだしているのです。ことばを初めとする象徴機能を持つ媒体は、一般にそのような性質を持っています。

### 従来の言語認知障害の捉え方

このように考えていくと、従来行われてきた言語認知障害の評価法の基本的考え方は次のようにまとめることができます。対象や事象を子どもたちに呈示し、それが何かを回答させて、その回答内容によって彼らの言語認知がどの程度遅れているか、あるいは歪んでいるかを評価しています。そこでは、われわれの物の見方でもってその意味を規定し、それが普遍的で一義的なものであるということが前提となっています。私たちの物の見方は、これまで生まれ育った環境のもとに、文化的影響を受けて身につけてきたものということができそうですが、それを客観的で、普遍的なものという暗黙の前提があるわけです。

自閉症の言語認知障害の本質はどこにあるかを考える際に、ここに指摘したことは大きな意味を持っています。

### 関係障害臨床から見た言語認知障害の問題

私たちはこれまで主にコミュニケーションの成立に困難を持つ子どもたちを関係障害という視点から捉えて介入することによって、従来考えられてきた子どもの行動障害などの病理現象が、けっして子どもの側（個体側）の障害として帰着できないことを幼児期から青年期を通して指摘してきました（小林, 2000; 小林, 2001a）。

ここでは私たちの依って立つ基盤である関係障害臨床の経験の中から、とりわけ幼児期早期の事例を取り上げながら、言語認知障害の本質について考えてみたいと思います。

#### 1. 事例 A 男 初診時1歳8カ月

まだ発語はなく、歩くことができない。精神運動発達遅滞をともなった自閉症児です。

治療開始直後、A男は、Mother-Infant Unit (MIU) で、床にころがっているたくさんのボールを手で扱い、ボールが動く様を見つめながら追いかけることに夢中でした。周囲の大人の存在にはまったくといっていいほど関心を示しません。A男の動きが止まったときに、母親が頬ずりしようと近寄ると、顔を背けて母親に背中を向けてしまい、ふたたびボールに夢中になって動き回っていました。

治療が始まってしばらくは、そんな自閉的行動が目立っていましたが、少しずつ周囲の大人の存在に関心を向けてくるようになった頃でした。女性治療者が彼から背を向けて床にすわっていると、おもむろに背中を彼女に向けながら、後ずさりするようにして近づいてきました。こちらに関心を向けて相手をしてもらいたいのかなと気づいた彼女は、すぐに方向を変えて彼の前まで回って相手をしようと移動しました。すると、彼はすぐさま反対方向に回転して彼女に背を向けてしまったのです(図1)。典型的な接近・回避動因的葛藤を示す行動です。

治療開始直後のあるセッションで、A男はいはいしながら、MIUに置いてあった「パンチングドール(起きあがり小坊師)」(図2)のそばに寄って来ました。そばで付き合っていた母親は、相手をし

ようとしてそれを思わず手で何度か押して左右に揺らしました。するとA男はひどく怒り、手でそれを押さえてじっと「パンチングドール」の裏面を眺めていたのです。そこには注意書きの文字とマークが記されていましたが(図3)、A男はそれに魅入っていたのです。

## 2. 母親と子どもの対象への関心のずれ

母親が「パンチングドール」を思わず手で押して揺らしたのは、きわめて自然な振る舞いです。その玩具はまさにそのようにして遊ぶように作られているからです。通常、身の回りにある物には制作者の意図が反映され、その物にどのように関わるかは暗黙のうちに規定されています。だから母親が行った振る舞いは至極当然のことでした。しかし、A男のその物への関わり方、着目の仕方は明らかに異なっていました。彼にとって、そのときのそれは「パンチングドール」という玩具ではなく、記された文字やマークそのものだったといつてよいでしょう。このような親子のある対象に対する関心や興味の向け方がずれることは決して珍しいことではなく、ほとんどの場合このようなずれを日々蓄積しながら、日常生活が営まれています。こ

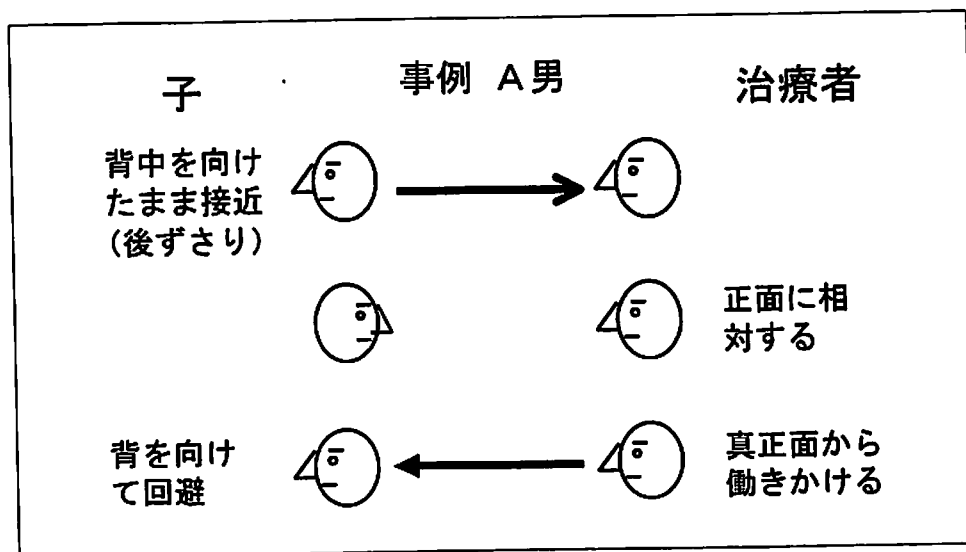


図1 事例A男に見られる関係の悪循環



図2 パンチングドール

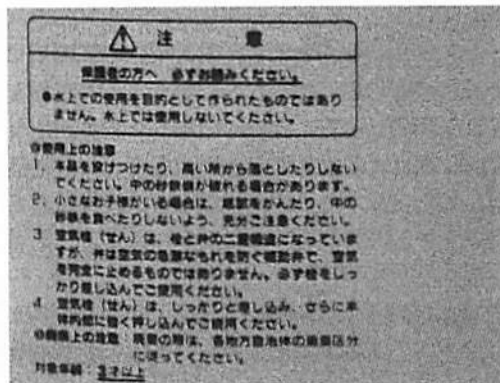


図3 裏面に書かれた文字やマーク

こに自閉症の言語認知問題の核心的な部分が潜んでいます。

### 認知の働きと言語機能

私たちは自分の周囲の世界をみんな同じように捉えているように思いがちです。しかし、実のところはだれひとりとしてまったく同じように捉えているということはありません。世界をどのように捉えるか、それは認知あるいは認識という心の働きで、そこでは言語が大きな働きを担っています。言語を媒介として初めて、人は自分でどのように世界を認知しているかが分かります。しかし、われわれが同じ言語表現をしているからといって対象をまったく同じように捉えているかといえば、けっしてそうではありません。ことばでは表現できない微妙な感じ方の相違などが、その人独特な対象世界を形作っています。

#### 1. 対象の持つ意味は文脈に規定される

身の回りの世界を見渡してみただけでも痛感することですが、われわれの周りには無数とも思えるほどの対象が存在し、時の流れの中でさまざまな事象が不断に生起しています。さらにひとつの対象は、けっしてある特定の意味だけを担っているわけではありません。一枚の「紙」が、何かを書きたいときには「メモ用紙」に、使わずに捨てられれば「紙くず」に、折って遊

びたいときには「折り紙」へと、状況によって、当事者がその対象とどのように関わるかによって、対象の持つ意味は変わります。対象の持つ意味はその文脈によって規定されていると言わねばなりません。

#### 2. 対象と属性

たとえば、一個の黄色い「ボール」を想像してみましょう。その「ボール」と称される対象には、さまざまな性質が備わっています。素材はゴムで、表面は艶やかで光り輝き、黄色い色で、丸い形で、手のひらに乗るほどの大きさで、弾力性に富み、床に向かって投げると大きく弾み、互いに投げ合って遊ぶための道具など……。これらはすべてその「ボール」に備わった性質で、これを属性と言います。このようにあらゆる対象は多様な属性を持っているのです。

#### 3. 対象の認知のあり方はその属性と不可分の関係にある

ある対象をどのように認知するかは、その対象の持つ属性の何にどのように着目して関わるかということと密接に関係しています。ひとつの対象が中立的に（いわゆる客観的に）、いかなる文脈においてもまったく同じ意味を持つということはありません。

私たちはこのことを普段ほとんど意識することなく、日々の生活を営んでいます。このような心の働きは、暗黙のうちに遂行されています

が、このことこそ私たちが住む社会の文化の働きということもできます。生誕後、ある地域で他者とお互いに関わり合い、さまざまな影響を及ぼし合いながら、ともに生きています。生きていく知恵の基本となるものの多くは、言語機能の獲得以前の生後数年間に獲得されていきますが、それはいつの間にか身体に記憶され、普段は意識されることもありません。

#### 4. 躰目する対象の属性と文脈

以上のように考えてみると、ある対象や事象の持つ意味を子どもたちに教えるためには、われわれの通常の認知のあり方をそのまま子どもに押しつけるわけにはいかないことが分かります。対象のどのような属性に関心を向けて関わっているか、このことにわれわれも気づくことが要求されます。とりわけ世界に対して独特な関わり方をしている自閉症児に対象の持つ意味を教えるためには、彼らがその対象とどのように関わっているか、どのような属性に関心を向けているか、このことを私たちはともに分かち合っていることが大前提になります。

先に呈示した事例 A 男の MIU でのその後の経過から、私たちの介入と支援によってその後の母子コミュニケーションがどのように変容し、子どもの外界への関心のあり方がどのように変化していったかを見てみましょう。

#### 5. 事例 A 男 その後の経過

しばらくすると（4カ月後）、A 男の母親への愛着欲求が強まるとともに、愛着行動がはっきりと認められるようになりました。しかし、まだ警戒的であるために、母親がつい積極的に関わろうとすると、そのような接近そのものが再び彼の回避的行動を誘発するのです。

筆者は前回の録画ビデオを母親と一緒に振り返りながら、A 男がいかに母親を求めているかを幾度となく示していくと、次第に母親は自信を持ち始め、焦燥感も和らぎ、根気強く相手をする事ができるようになっていきました。

5カ月後、やっと自分から母親に甘えて抱かれたがるようになっていきましたが、それでもしばらく

は穏やかに抱かれることは困難で、抱かれているときに激しく身体を動かし、じっとしておれませんでした。

その後2カ月も経つと、母親に抱かれることに対する葛藤はほとんど和らぎ、気持ちよさそうに長時間抱かれるようになりました。私たちが様子をうかがうと、照れたような恥ずかしそうな表情さえ見せていたのが印象的でした。

10カ月後、A 男が追っかけていたボールを取って、高く挙げて A 男に取らせようとする、自分から意欲的にしばらく一所懸命取ろうとするまでになってきました。母親がうまく合わせてやると、母子間でボールを転がし合って楽しめるまでにもなりました。

13カ月後、ついに母親や私たちがパンチングドールを押してみせると、それを見ておそるおそる自分も同じように扱おうとするようになりました。最初はこわごわとしていましたが、次第に何度もくりかえす中で、面白くなっていく様子でした。私たちと同じように対象を扱う、つまりは対象に同じように躰目して扱うということに関心を示すようになったのです。

母親は A 男が今、目の前の対象にどのような関心を向けているか、容易に察知できるようになり、私たちが気づかないことにも、すぐに応じられるまでになりました。このように母子間で対象への関心や意図を分かち合えるようになると、先ほどのパンチングドールを母親が遊びの中で左右に揺らしてみると、A 男は興味深そうにしばらく見つめ、おもむろに自分でも恐る恐る手で押し始めたのです。面白かったのか、ついには、何度もくりかえすようになりました。このような対象への関わり方の体験が日々学習され、その場での母親の語りかけや働きかけが子どもの認知の枠組みを形作っていくことになるのです。

#### 早期発見と見立てを考えるにあたって

これまでの議論から私たちは発達障害の子どもたちを診ていく際に、私たちの能力発達を基

準にしてどの程度遅れているか、あるいは歪んでいるか、といった基準でもって評価するという態度が、いかに子どもたちの主体的な気持ちの有りようをないがしろにしたものであるか、分かってきます。私たちの心の中に根強く生き続けている個体能力発達観と言われるものから、少しでも自由になることが、本来の子どもの姿を生き生きと捉えるためには必要不可欠であるのです。子どもたちの生活は常に新しい物事の発見の連続であるということが出来ますが、私たちは自分たちがこれまで身につけてきたことは文化を子どもたちに伝承していく役割を担っています。よって、子どもたちが外界をいかに知覚し、認識していくか、それを私たちは援助していくことが強く求められています。

そこでは、私たちの物事の認識のあり方(枠組み)を一方向的に押しつけることがあってはなりません。子どもには子どもらしい、ひとりひとり固有の外界への関心の持ち方があります。それはその人個人に大きく依存したものであって、決して私たちには推し量ることさえできない性質のものであります。ある対象をどのように知覚し、着目するか、そうしたことを私たちは相対しながら感じ取り、それをもとにして子どもたちに働きかける必要があります。対象に対する子どもの関心の向け方、着目の仕方を理解するという事は、子ども自身の意図をつかむこととなりますが、そのことを抜きにして、その場のある対象の持つ意味を子どもたちに適切に教えることはできません。その意味で、対象の持つ意味は文脈依存的であるということが出来ます。文脈によって対象の持つ意味は多様に変化するのです。

従って、子どもの主体を大切にすることが徹頭徹尾求められることとなります。これまでの発達障害の診断や評価は、私たち大人の存在を発達の完態とし、平均的な子どもの発達像を想定し、それからいかにどの程度遅れているか、あるいは歪んでいるか評価するという視点から行われてきたということができましよう。

今日、自閉症児は異文化の中に生きていけるとする言説を耳にしますが、自閉症児はけっして異文化の中で生活しているのではなく、彼らは文化そのものの伝承、リサイクルの循環の中に与されず、文化的営みを私たちとともに歩むという体験そのものを蓄積できていないところに、最大の問題があります。彼らも私たちと生活する中で、ともに生きていくことに最も大きな喜びを表すのは、同じ人間であることを考えると、至極当然のことのように思われます。

### おわりに

以上の議論をもとに、発達の問題を早く見つける際に重要なことは何かをまとめて本稿を締めましょう。発達の上でどのような難しい問題を持つ子どもであっても、私たちは彼らとともに生きていくための(ことば)文化を彼らに伝承していくという役割を担っています。よって私たちは彼らにことばを初めとして生活していくためのさまざまな知恵を教えていかなければなりません。しかし、そうだからといってこちらの思いのみでもって一方的に教えていくことはできません。子どもたち自身も自ら主体的に生きていく存在でもあるからです。本稿で対象となっている子どもたちは、私たち一般の大人に比して、外界に対する興味の持ち方、着目の仕方に彼ら独自の個性的なものを持っています。私たちは、彼らのそのような個性的な一面を大切にしながらも、私たちと同じように外界への関わり方をも体得してもらうように働きかけていかなければなりません。そのためには、彼らと私たちの気持ちや意図がお互いに通じ合うような関係を持つことが求められます。そのような関係づくりのためには、愛着形成を基盤にした安全感が子どもの中に育まれていくことが不可欠になりましよう。筆者が言語認知発達の基盤に愛着形成の持つ重要性を強調するゆえんでもあるのです(小林, 2001b)。

## 小林隆児：見立てと介入

本稿は、第11回日本乳幼児医学・心理学会(2001.12.01.白百合女子大学)シンポジウム「発達の問題を早く見つけることの意義」において発表した内容に加筆したものである。シンポジストとして発表する機会を与えていただきました繁多進会長(白百合女子大学)に厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

- 小林隆児(2000). 自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—. ミネルヴァ書房.
- 小林隆児(2001a). 自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—. 岩崎学術出版社.
- 小林隆児(2001b). 発達障害治療における愛着形成のもつ意味. 乳幼児医学・心理学研究, 10, 29-34.